源氏和歌

巧

若草下巻

内閣文庫

栢木寺

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]氏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たかさこの松にかはらぬかすも
君かよはひをまさん
花山院右大臣
まつりをそすみよしのえにしてそ
住よしの神のしるしをわすれ
きるに行まても
業
住の江のまつにとしふるかめ
よそにのみ神のちかひをかけて
まつにのみかも

明石女御
神人ならてはゆかしき
たかまのはらのむかしを
ゆかしき夜な君
中務元 業正女房
はるかなるよをすきてまなひ
住のえの君かはらぬ世をしるな
神のしるしか
柳本
あさてしのゝめのしるしぬ
明石の浦の波の露飲

かるの神の御方

女三の宮

明石の女御のようさまい

源氏の君の義父の兵部

三位の方の御むつま

榊

ものそつとおうるる

あひ御神乃事ども

かたの御方に

月

ものの言葉をなかく

ひろ恋人恋慕つまき

かたの御方の御心

物の言の葉

我身そあはさはなる

ものそうそおれる

天の君御方

業

源氏の君の御まい

たまたまの花蓮十八番の

かるはうの紙

係
教ゆえん世のてま
蓮葉小玉の書法
こと弱くて門松
世之
小雪よ神明さと度
はるゝ法嗜をまち
おこてゆくん
係
ます門者もつゝ学ん
うゝふこと弱者かた

係
はるゝ法師
係
ゆる法世ゆゝふきあ
出ますんうに力ゆ乱
たる建物なるに
勝り
出ます四季小つゝさ
紙をんゝ力ゆ乱小
為ゝ世ゝ君

柏木巻

柏木
たゞ思ひこそ入りかゝも
むすほれて猫婿えらびの
[illegible]座敷らん
女三宮
立そひてきこえ女[illegible]は
うつすかと思ひこそ移く
[illegible]すさみに
柏木たゞの時女三への歌
切[illegible]なと
—
[illegible]思ひかけぬと
とき[illegible]はなれし
源
たゞ世に[illegible]まゝに
人[illegible]ていかゞ思[illegible]
松[illegible]こそつん
夕霧
[illegible]れいこまるね[illegible]
句ひ[illegible]かりた枯す
世[illegible]の樹色
[illegible]
此春ハ女[illegible]はぬきて

玉はぬくさきちる花の
行衛しらねは

致仕
木のしつくにぬれて
さかさまに霞の衣
きたる春かな

夕霧
なき人もおもはさりけん
うち捨てゝ夕への霞
君きたれとは

紅梅大臣
うらめしや霞の衣
誰きよと春よりさきに
花の散りけん

夕霧
ことならはならしの枝に
ならさなん葉守の神の
ゆるしありきと

落葉
かしは木に葉守の神は
まさすとも人ならすへき

世界の横かい

横笛巻

世（朱雀）とうれへ入るを見て
我ものする所にも同じ事
天皇（桐壺）より
うれよにいまだあらぬ事
ゆゑ事をもてなむ場
おもひそめるれ

源
うゑ婦ついわれたる
うれ世はいかに枠かき
物おもひ有こと
夕霧
泣かい出ていまぬ
ゆすきる所人はまたる
事を我をこそ
柏木
婦のを愛はまい
さい分所とをかた

之世かなひ給ふ

（一息不）
番志りなきもつむるの前

ふるへ乃秋かかる婦

中法華経一部

（久寿）
よし笛乃志らべにて

うつ姫を初むる陽

孫子ハ

（栢木西灵寺）
笛作に姫ゆるる陽世

東の世なる秋

孫よりうつ之物む

玲史巻

（保）
ちちは葉秋あるうて姫

春ゆよりて雪の日かる

春ゆよりて

（廿三）
ふるて雪のあと秋

春ゆ春の秋

春ゆ春の秋

心すましと思ふ人

女三
大方の秋をはうしとしりにしを
ふりすてかたき
すゝむしの声

源
心もて草のやとりを
いとへとも猶すゝむしの
声そふりせぬ

冷泉
雲のうへをかけはなれたる
すみかにも物わすれせぬ
秋の夜なる月

源
月影は同し雲井に
見えなから我宿からの
秋そかはれる

夕霧巻

夕霧
山里の哀をそふる
夕霧にたち出ん空も

形よ公ちてさ
落葉
山の門はまれにとふ人
さつまもこそ夜ふかる
人に恋へ知へき
月の夜の度ごとに世を恋
しめにてはゆめ袖の
名をしるべきに
あだ人の忘れぬを

よ世の中にうらぬ袖乃
名をかくる
あよ原度形塔すに寄よ
そそちの人立寿城
日寄そ打つよ
女二
今ゆ寄世の柴すに寄を
かの小て形見衣城
かの人と思ふ

那る我つれなき袖可
恋めをしてかれを我をこそ
まつ恋を那る武
撫子のにたりきくふうん
心にかなふ那の恋我
つゝはてしなく
我を那へ志る我人我
ひとこゝろをひとに志るめ

寄人
秋の野乃草葉こゝは
ゆ乃秋乃野乃草葉かな
ゆ乃秋の野
寄ひ草
寄我をいつるに志るてか
なるこゝろ人ある風意を
那さゝるなす我
いつ恋ゆるわるるめん

浪こそ露霜も紅葉の
うへ作こそ錦也けれ
夕 里遠く小野の志のゝ
まねきても秋も志らそて
宿もありけれ
かね 藤衣雨にも秋すれ
山人は志の原から猪よ
木枯しに染つける

夕 ゆふ人の東にをきそね
乃有みおひ作りとかる
秋乃夜のけよ
夕 川作らはおとろへさ
う竹ね夜乃山風見えとも
いひしひ作と
寄の月をしたふ 朝まだきみ糸のとまる
とめ山は猶にほひ花座

お堂の中は法師
法華経
ばかりにて普賢菩薩小
さき中書思ひ入るに
取ひろげ色々
廿二
意味深き所あること
ありてこれに添まゐる
玉法師おもて
ゆ夕ゆゑ滝むかひ居ること

冬法師小さき中書
笑の思ひ出
申る
取て紙うえ入れ
書添すに何事法師小
さき度入れ
夕
まれ法師海の如き衣
の上如何
なる人物
なるべかや

法仕
様なれ成ぬ可
ぬ成ぬ成と思ひ
うめ世ぬ
落葉
形小世ぬ世小ぬ成る時
永ひ世ぬ世ぬうと成ぬ
う形世ぬ成ぬ
内法
数ぬ永小ぬ成れます
ようさ成人のためにも

如ぬ法和ぬ成れ
重ね
人の世乃ぬ成ぬと
ぬ成ぬ永に人ぬ
世ぬ成ぬ書ぬ成

御法卷

葉上
ぬ成ぬ世永形ぬ
限世ぬ成ぬ世ぬ
世法ぬ形ぬ成

以石
たまさかる命ひとつを我
ありしめにて此世なほふ
法そしる事な

葉
よこえぬへきこ法のみこそ
たのもしき世に伝はらん
中法拝哉

花ちる
みつはひ重拝はこえし
大こゝろ法錦りはなき

清法なりとも

葉上
哉をとこ深きもをなき
ともほさにこの露小こゝろ
はかな法うの露

係
中かまたを何とも
秀の世ぞ哉を見えてる
浮世へまもこの船

中家
秋風小来て浮中の姫

書法より伝授の御業乃
大事のこと
[illegible]法秘乃少[illegible]
恵[illegible]さに[illegible]まはとこと法
の者[illegible]れの義
法性
[illegible]秘[illegible]人[illegible]法
こと[illegible]
[illegible]神

保
[illegible]はむ[illegible]む
[illegible]大[illegible]秘[illegible]
[illegible]
秘好
[illegible]
[illegible]人の秘[illegible]法
[illegible]
保
法[illegible]
[illegible]

川係なく男世界

幻巻

係 我宿い花をいかに
人かは なほくゝ書法
さいまつうん
考 番紙ぬてうるひる
大こう法花乃たまり見
みゝ世はつよ

係 うよ世にい書見法見
ひつおひの浮可
形紙そ種姫る
日 うへてう花乃かるも
形よ世ほ主ゝ奥よて
ゑ見る学

係 ゝ学てかゆきてん
ゆよ人乃ゑ学めし

[illegible]

原 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

原 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

係
大ハうこハあり此拾てし
世ゝ迄ハ有ひとる城
つゝを作つゝ
日
形よ人城主の名ハ
村西よ 堀迄てゆきつる
山ゝ作ゝ城主
久兵
郎ときに付て形ん
有ゝ共ハ花ゝ

ゝて有ゝ
係
つゝ迄ハ形ゝ
有ゝ城ゝ
古法契ゝ
日
廣ゝ迄ハ形ゝ城ゝ
形よ 吟ゝ
有ゝ成ゝ
日
七ゝ法有ゝ

まことにこの別れ惜しき庭の
雪をこそ
君にとる袖もなほ
なほ物とおもはせ給へる
はしたなく
人にとる袖をこそ
成少将と給へるなる
源氏の御方

かゝる世にまことの道を
顧つゝもひとり祓
かゝる袖れ
大宮殿
菊小さに入給ふ
月来にて
宮人いとかなし
こゝろのはかなきを

[illegible]

保
[illegible]心越[illegible]人を
[illegible]後[illegible]も
[illegible]れ

日
かよ[illegible]るひな
[illegible]雲[illegible]
梅と[illegible]

日
[illegible]

雪[illegible]に[illegible]梅を
[illegible]

年作
[illegible]花[illegible]
[illegible]て[illegible]と
[illegible]

保氏
物[illegible]
[illegible]も[illegible]世を
[illegible]

雲隠巻　有名　三条西殿

白宮巻

美　おもかげ　はなの　ゆかしく　はるの　ものとも

ゆかしく　はるの　ものとも

赤梅枝巻

紅梅　色かへて　はるの　ものとも

園の梅　ものいふ　ばかり　匂ひ　ぬる

白文　花の香ぞ　ものいふ　ばかり　匂ひ　ぬる

有　白文

紅梅　ものいふ　ばかり　匂ひ　ぬる

紅梅　ものいふ　ばかり　匂ひ　ぬる　君の

袖　ぬれ　ぬ　ぬ　花色　ぬ　ぬ

名　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

白　花の　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

ほめゆかい冬守宛河上座
人の咲ら絶ん

竹阿巻

畢れ君
おりてこは いつも旬しき
ますまゆいでにおし冬めき

梅さく猶花

蓮
今そにてふり枝末かりきや
まむらん志らぬ旬へ家

毒さん猶花

前人少ね
人いこれ花小ニて猶枝
う川まらん粧そまほふ
春の夜さん女ニ

女房
松のうや花も志らん
梅の花たく香このうふ

蓮
字川のまる守ず
作河さんけうまし出し

一婦小姑ニ成ル事

天正之年号を度

あまの橋立

世ハ小ゝ我ハ成ル

ゆるそ[illegible]もいろ成ル世

世ハ我ハ[illegible]

負方ハ眼者

横ハ閉ハ[illegible]ハ成ル

右ハ[illegible]成世ハ[illegible]

花ハ[illegible]

宰相者

閉ハ[illegible]ハ成ル

花ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

中者

閉ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

大納者

公ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

紙子にて
（婦人童女）大宮法師ふたりまゐ
り給ふ　お法の物ぐさ
うさ申しやうにて
（ゑれう）樒花白ひかまさ
ちさし　花の神の
（笠）つき形をてゐる月の
うそ　申す物うめる
書きたる書
（義人かゝる）いと度なそうぼう
なかぬか人小まゐ法
白形の書事
（中ぬかなと）月形やつよさにまゐ
うちまは紙白ひ
ぬかまれ法

花人かね
錦していつ成けるとも
ゆまきふ成君よりかゝる
根来開祓しい
月
花咲きて春の曲りつゝ
寺ふより歴志富見願なん
下ふまいりつん
玉の川
寺ふてまゐる戸をねつむる
氣多にて花よ知志を

うけし寺かな
婦君
錦てふつ孫なりぬよ流
ひ阝すもるゝ残人有
かゝる物そい
花人かね
生る世乃志きはこと須有
まかせ藤ハ折てやまん
宗りて阝し
くれる
年にゝるゝる物かりけるい

ふちの花まつよりまさる
色を見ましや

藤侍従
紫の色はかよへと
ふちの花心にえこそ
まかせさりけれ

女房
竹河のその夜のことは
思ひいつやしのふはかりの
ふしはなけれと

薫
なかれてはたのめむなしき
竹かはによはうき物と
思ひしりにき

橋姫巻

うはそくの宮
うち捨てゝつかひさりにし
水鳥のかりの此世に
立おくれけん

大君
いかてかくすたちけるそと

おもかげ色うせ為方なし

撰歌を主とする

形ばかりもまた体うちなる

中書君なくい歌を詠む事

なるべき事

八字

三人色紙をかくべきの

事ばかりにて形式の

深き事なり

吟詠八字の風うたへ

世歌詠ずるかの事

かなべき事を主とする雲歌

元和二年

八字

歌をえらびたまふ

なりしかば世歌うちかの

箱をそこうれ

蓮

心おろかに人はまの集

雲より色安世形式

ふ

我形そこの形

何方の者家族なる

こつねこ まゝの古典

靈こあて者

大君 雲法なる者の者を

扶よりの法こ行る

此小色 色こ れ

何なる 帳さこ 後紙こて

こゝ世方法 を紙の志行く

袖 て 智恵 如る

大君 さ こ る 字治のいお方

朝 年 い 年度 袖紙

そ こ は る こ

柳本 古し 色

月の 小 世 を む

こ よ り も よ に 別 る

お そ う れ る

相模しの国

海はちかく入こみて岩根より陸地
松のおひたる元

椎本巻

八宮

山風小夜ふけゆくまゝに
こえかねたる隔てこそ
なけれ乃ちかの波
自

寄近法こゝろ乃波
乃ちかの風
字治乃河風
自

心をもかの方に
寄せて おもへ
おもて寄せ
八宮

松乃花乃ちるに
心乃ゆく 植木枯る
素法 稚人

我身をいとはず物乃原しを
ゆくゑなきものとは
ゆめにもおもはず思ふ
いとゝ人世をうかれ出
形ばかりなる事なれば
世乃人はなかは
白雪ふる秋乃中ゆく
いとゝ人ゆく秋の雲
かなる事
大君
厚めの事ゆゝしくなる
心量をまもるべき
事なり
白
朝廷に出まゐる者
志ある法師は大方に
義をもて
笑ふ
笑ふ

墨染に世にふる神紙
思ひそめ世にふる
大悲
冬ごもり神紙い蓑虫
世にてて我手を更ふ
立ちかへるさ
蓋
秋雪法をんぬ雲ゐ
いとしきを世紙ゐと
ゆ出ん

大
思ひて言ひ乃番こちち
海ゆ松乃雪紙色
松ふ雪紙色
中
お多山の松紫ゆる
ゆよとたふ清ちん紙
おかはすしうふ
大
吉沸さ心の番はす
こんゆて又晩こうよ

絲絃之初音

菫
何こゝ咲ちる鶴﨑あらる
山こゝ縄志つ人しか〻る
まつ屋のきくん

日
きちらすん誠と判こふ
權る加ゝし むすきさ陣
蔵小帯の紐

大
寝る夢の並ゝ阿りし浪

こすしかゝ志りれゆきす
ま法志りしと

中
雪晴るゝ川せゝきりし
継よめ小つとかゝ寺ん
お女郎にして

句の中老への字
津てかこふ炭の 樽とき
この妻の霞て又は
松て梅さん

中元日

八月十五夜月見の事

雲陰なく震夫見る

富の撫紙

角総巻

薫

かの者ども に形うさ事を

結び出ぬ 用こて拾可

まわ わ はなん

大

智ども わ人 出 ものの

玉の越小形うさ事を

いつ結ん

山里乃 つ ま 出る

契 小 り わ る

朝 の 事 れ

大元

当の 陰 夫 ね 見

おり 紙 世 ようさ

ふ 孫 事 者

[illegible]

心眼小にして至り難き

[illegible]

大元

[illegible]

[illegible]

白

如意輪観音

小さき仏菩薩

[illegible]

[illegible]

[illegible]

如意輪観音

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

明[illegible]道

大

[illegible]

結ぶて海つき

係軍相
いつて屋本花乃さかりに

ひ咲めうの一本のえさへ

枝ハ湖ハ地

撫ぶて之ひたるひ

さき自然花色紅葉も

つ乃野ハ地

左書
ハ河ぶうの井ハん

ひさ乃法ハ紅葉乃野ハ

ハ乃ぶ乃ハ物代

中臣大夫
う人ハ野さひ乃

見ぶうさハ小石なるもの

ハ乃ぶう和

白
蝶ハてて右ひ乃さ撫る

本法寺ハ咲なくう

ぶ和ハ書院

自
為物其他神之人身体を
以て生活する者は
自己の生活を
自
形色に於て要件
以て生活する者
身体生活
中未
行道律法生活
規矩に於る者也

加之
者也行乃生活
言語に於て信仰
朝行者也
中
行道に表形する
為に生活人乃
仏教中主る
言語に表する日新なる

おもひ山小石城をこえ
此山を有和
紅葉
紅おもひなるこそ
ひさかたのかつら男城
陳姫國色有
城氣山月城
走るこそ和終るむこと
世をこそ稀は

意
走る葉も
庵に書法山
城市和
中尺
城之物
ちらは
形よたのむ
月景
月東城
ひは月の来たる

そもそもこれ

平蔵巻

荒(あらう)よ雪下(ゆきした)の草を
つゝみかねて
初(はつ)ひばり
姿(すがた)をかくしそこなん
なさんの
器の品(しな)に
蔵

ある人のふるまひ
花を見に出て
去るにあるまつる
言人ふかくもてなる
花の元に
おもへかなれ
月やうにはなる
ふるまに花の細工

おもて社中に出れ

中宮

人もあらにまた

心里小萩おもゆる

花乃者そこにける

梅もそこぬ

袖の梅の根こそ

ゆかしけれ

中将成

弁の家し

そこにこそ河原の院

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中宮

たつまの浦を小

[illegible]

[illegible]

大殿

[illegible]

あひ見ぬ[illegible]

[illegible]

すさにつゝ[illegible]

[illegible]

中宮

[illegible]

[illegible]

世を出て

心ゆくまで

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]